キャンパス・コラム

暇の効用

前期試験が間近に迫り、コピー機の前は長蛇の列である。サボッていた講義のノート、予想問題の模範解答、いや、中には縮小コピーでカンニング・ペーパーの作成なんていうけしからぬ輩もいるようだ。日頃はバイトやサークル活動、就職活動、資格試験の受験勉強に忙しくて講義には出られなかった。単位をかせぐためには効率的に行こう、というわけである。

講義に出席するだけが勉強ではないし、効率主義がすべて悪であると決めつけるつもりはないが、なぜ猫も杓子もこう忙しがるのだろうか？仕事のノルマをこなさなければならないビジネスマンならいざ知らず、大学生活の４年間は、学生という身分にだけ与えられる、しかも、長い人生でただの一度だけ与えられる猶予期間である。長かった受験戦争から解放され、卒業後に待っている過酷な競争社会への突入までの、まるで台風の目の中にいるような、ポッカリと雲一つない青空がのぞいている貴重な時期、これをじっくり味わって欲しいものだ。

だが残念なことに、その有り難みがわかるのは、大抵それが過ぎ去ってしまってからだ。そんなバカバカしい、時間の無駄だ、と省みもしなかったことが、やはりあの時にきちんとやっておけば良かったのに、と後悔の念に苛まれる。それが青春というものかもしれないが、ならば後悔は少なくしてやりたい、というのが教師の老婆心だ。

試験が終われば夏休み。短期留学や旅行、長期のアルバイト、就職活動、ゼミやスポーツの合宿と、それぞれにスケジュールはすでに詰まっているだろう。しかし、誰にだって一日や二日ポッカリと空いた日があるはずだ。そんな時に、あらためてもう一度じっくり自分を見つめ直してみたいものだ。普段はなかなか読む気になれなかった本を読んでみるのもよい。きっと思いがけない発見があるはずだ。

広報委員　田中　裕（商学部教授）

編集後記

大半の学生にとって、大学が「卒業資格を得るところ。就職までの通過点」となっていることは正直、私たちも否めない。長引く不況で中高年の解雇も相次いでいる時期に、就職活動が重なった学生には、不運というほかはない▲春採用に内定切符を手に入れられなかった人は、夏休みという充電期間を経て、秋採用に賭ける。しかし、「会社」は確実に変わり始めている。企業側は「もはや、大学の学問に期待しているわけではない」という▲国際競争に立ち向かう企業社会は、学生に即戦力・専門性を求めるようになってきた。そこで学生は〝自分の売り〟という自己主張を懸命に考える。「いかに自分が個性的な人間か」という殺し文句である▲社会は、いまの若者を「マニュアル人間」とか、「指示待ち人間」とかいう。しかし、政治、経済、社会が大きく変わりつつある時、「人生の豊かさとは何なのか」を改めて考える必要に迫られているのも事実である。ところで、先日の選挙には投票に行ったかな――これだって自己主張の第一歩であることは間違いない。

（広報課）

Hakumon ちゅうおう

2000・７月号（第159号）
2000年（平成12年）７月１日発行

発　行　　中央大学広報委員会
〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉広報課　☎0426－74－2146

印　刷　泰成印刷株式会社
〒130-0026 東京都墨田区両国３-１-12
電　話　03-3631-8141